

## 日本保健物理学会第 49 回研究発表会 開催報告

岩岡 和輝

*Iwaoka Kazuki*

(一社)日本保健物理学会は放射線から人や環境を防護するための学術及び技術を促進し、その成果を社会並びに実務に反映させることによって、広く人類の繁栄に寄与することを目的として活動している学術団体である。日本保健物理学会は、大学、研究機関、企業などの放射線防護、安全の管理・教育・研究に携わる技術者、研究者で構成され、会員数は現在約 1,000 名であり、1961 年に米国 Health Physics Society 日本支部結成準備委員会として発足して以来、半世紀あまり学術・研究活動を行ってきた。

そして、今回、第 49 回目となる研究発表会が、2016 年 6 月 30 日から 7 月 1 日に、弘前文化センター（青森県弘前市）において開催された（写真 1）。今回の研究発表会のトピックは、①環境放射線（能）、②ラドン、③放射線計測、④線量評価、⑤放射線影響、⑥医療被ばく、⑦福島原発事故関連、⑧防災・緊急時対応、⑨廃棄物、⑩現場の保健物理/管理・保全、⑪法規制・標準化と多岐に渡るものとなり、60 件以上の一般口頭発表と 45 件以上のポスター発表が実施された（写真 2, 3）。また、それらに加え同学会の専門委員会や研究会の活動状況や喫緊課題に関する 10 件の企画講演（下記参照）が実施された。

1. 「青森県の原子力安全対策行政」（座長：岡村泰治氏）
2. 「低線量放射線の健康リスクとその防護に関するコンセンサスの構築に向けて」（座長：松尾真紀子氏）
3. 「国民線量評価委員会」（座長：高橋史明氏）
4. 「国際対応委員会（AOARP Special Session）」（座長：甲斐倫明氏）
5. 「福島事故現場における放射線防護の現状と課



写真 1 会場（弘前文化センター）



写真 2 会場内の様子（講演）

- 題」（座長：橋本周氏）
6. 「水晶体の線量限度に関する専門研究会の活動状況」（座長：横山須美氏）
7. 「専門資格委員会」（座長：小佐古敏荘氏）
8. 「内部被ばく影響評価委員会」（座長：石川徹夫氏）
9. 「放射線防護標準化委員会」（座長：橋本周氏）
10. 「除染目標値を議論する」（座長：山西弘城氏）



写真3 会場内の様子（ポスター）

本稿では、これらの企画講演の内容について報告する。

「青森県の原子力安全対策行政」では、県内で進められている原子力燃料サイクル施設、東通原子力発電所、大間原子力発電所、使用済核燃料中間貯蔵庫施設といった原子力関連プロジェクトの概要について紹介があった。これらの施設を運用するためには、原子力防災対策、原子力施設周辺環境放射線モニタリングを適切に実施していくことが重要であると、述べられた。

「低線量放射線の健康リスクとその防護に関するコンセンサスの構築に向けて」では、福島原発事故後の専門家と一般社会との間にある認識の隔たりについて討論が行われた。専門家の中でも、専門性の違いによって知識の質が異なるのは当然であるが、一般社会から見れば専門家は等しく知識を有しているという先入観があり、まずは専門家の中で共通の知識や認識を構築していくことが大切であると、述べられた。

「国民線量評価委員会」では、原子力安全研究協会が2011年に公開した“新版生活環境放射線（国民線量の算定）”には、福島原発事故で放出された核種の影響が含まれていないため、それらの影響を含めた線量を評価していくことが大切であると、述べられた。

「国際対応委員会（AOARP Special Session）」では、AOARP（アジア・オセアニア放射線防護協議会）の特別セッションとして、自然や医療被ばくによる外部線量や内部線量に関する講演が行われた。また、講演中に、Jim Hondros氏よりAOCRP-5の宣伝

用DVDが上映され、AOCRP-5への積極的な参加が呼びかけられた。

「福島事故現場における放射線防護の現状と課題」では、保健物理学会がこれまで提言した放射線防護方策のフォローアップ状況等について報告が行われた。

「水晶体の線量限度に関する専門研究会の活動状況」では、同専門研究会のメンバーが国際放射線防護学会（IRPA）の水晶体線量限度に関するタスクグループのメンバーであり、その進捗状況について報告が行われた。

「専門資格委員会」では、医学物理士の資格取得支援として、学術発表会参加者に対して専用参加証明書を発行していることなどが報告された。

「内部被ばく影響評価委員会」では、多くの国民の関心事となっている内部被ばくの評価や影響に関する知見（主として評価方法、線量計算の不確かさ、健康リスクと線量の関係）のレビューが行われた。本研究発表会の企画講演の中でも、同委員会の発表は、テレビ報道関係者による取材も行われ、大変興味を惹くものであった。

「放射線防護標準化委員会」では、同委員会で現在検討中であるガイドライン“女性放射線業務従事者の妊娠期間中の線量管理方法（案）”の解説が行われた。また、緊急事態後の現存被ばく状況における放射性廃棄物の管理に関するガイドラインの進捗状況について紹介があった。

「除染目標値を議論する」では、除染目標値の在り方に関する講演が若手研究者によって行われた。除染に関する限られた資源（コスト）を効果的に分配することが重要であると、述べられた。

以上、本研究発表会では、保健物理学的な様々な課題について情報共有や意見交換が行われ、近年開催された同研究発表会では最高となる350名以上の参加が全国からあった。このような盛大な研究発表会となったのも、参加者、お手伝いの皆様、企業の皆様、座長、実行委員会、副大会長、大会長のご尽力によるものであり、本研究発表会事務局として心から感謝申し上げます。

（弘前大学被ばく医療総合研究所、  
第49回研究発表会事務局長）